

倭初葉後編

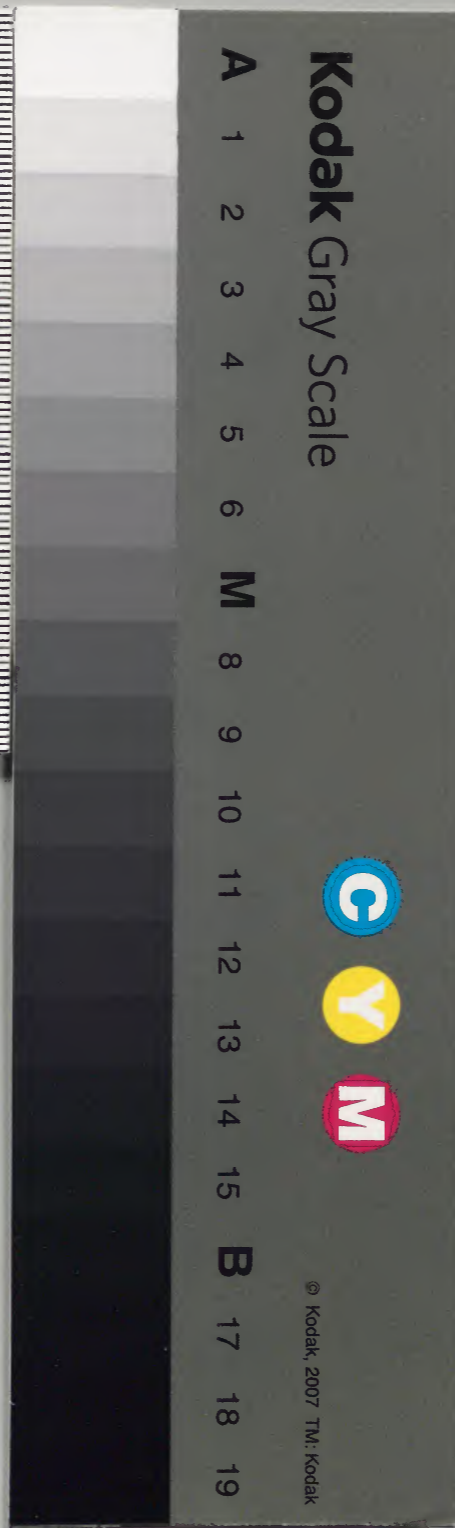
底登之部

十三

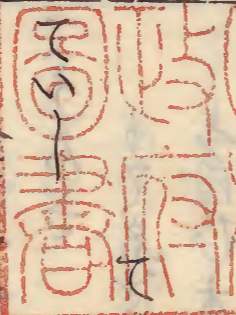
和書門類			
二	一	六	五
八	〇	八	〇
二	二	八	〇
冊	架	函	號

內閣文庫			
二	一	六	五
八	〇	八	〇
二	二	八	〇
冊	架	函	號

內閣文庫	
番號	和 21651
冊數	82 (77)
函號	263 10



倭築訓後編卷之十三



洞津 谷川士清纂

照石の義なるべし天工開物より穴山至十餘丈見伴

金石即見金と云ふ之伊豆國手石村平等寺の洞窟も金光

らうと云ふていりの名をうるべしていりのかろといふ

でいりこ 佐渡の方言之出入沙也といり酉陽雜俎小較子

驚則亦入母腹中といりもの之胎生をうるといへ

でいりこ 帝釋天と詛と邪法の尊崇する所之

ていりこ 絡石といふ定家らうと云ふていり定家の謠よりい

ふか名あり小葉のものをいせらるるていりといり石血也といり

よていりハ庭下也せきごを石上あるべし○播州越部の庄を禪

尼阿佛ふどの墳墓あり故墳也其處より定家らうと云ふハ常の

物といりりといり○千本の歡喜寺ふ定家らうと云ふ墓より

と應仁紀（一）と云く（一）（二）の類也又天主の和

△でうす 徒斯（一）と云く東見記（二）り及名蠻語也又天主の和

蘭語也と云く大明一統志の天使と同一神祠と云く

すくしよと云く

てうす 兆子とのけり標蒲の類也

てうけ 俗語也調解（一）と云くべし

てうけふ 嘲戯（一）と云くふか辞也

てうらん 行厨集（一）提燈（二）と云く是也仙臺（三）火袋常陸

よちつべし（一）ほんどん日向（二）と云く凡て摺疊（三）のふ多く此邦

の制之摺扇摺屏の類也

てうらぎ 草石蠶（一）と云く朝露葱（二）の義と其根の連珠（三）と

めて名と得（一）と云くべし○朝露草（二）朝（三）花開き夕べ

まひむ木綿の花の如く草たち（一）似（二）

てうらかす 朝弄（一）と云くの義也○嘲弄草（二）あり今誤て張良

草と呼者也と云く

てうらと云く 釣藤釣也舶来の者あり又津の國有馬山に

あり釣ハ葉間あり薬ハ其鉤と用ふ

△てとの 和名抄（一）と云く手（二）芥（三）の義と今ハてうのと云く

急語之新撰字鏡（一）と云く東國（二）と云く大坂（三）と云く

と云く

△でかて 俗語也（一）及く出来（二）と云く義あり○褒美の辞（三）と云く

と轉意せし也

てがら 功と云く手幹（一）の義あり（二）事業と譯と

△でくつと云く 出合（一）すの義也會（二）と云く（三）と云く意也又轉巧

と譯と云く思（一）と云く（二）と云く意也

てぐひのふく 手薬鍊引（一）の義あり（二）今手（三）唾（四）つけて

と弄（一）と云く（二）或ハ手（三）鼓（四）系（五）粘（六）と云く（七）今（八）蛮人（九）のめて

てぐひを榜葛刺（一）國（二）と云く（三）月令通考（四）楓虫（五）ハ食楓葉

虫也形似蚕吐糸如琴絃蚕人貨為釣絡と云々たる是なるべしと云々天蚕糸の音絡あるや又甜瓜の蔓瓜曝乾し金線の如くあるを糸と稱するは亦釣絡とすべし故に

△でけふ 出来ふの義也けふ反く也

△てす 魚の名によぐりて鯛と似て味ハ劣る

△てらるゝ 急速の俗語とて摩蠅の義蠅ハ下くと摩

△てせうとん 阿蘭陀より来ふ練薬也

△てせん 蔓草より鉄線也本草の鉄線草とハ異る

△てららるゝ 黒川氏の説より丹波の大栗と云々ハ出落栗を

△てとが 掌燈と云けり著聞集に云々

△てふあせぬふぎふ 元史より吾亦為汝握両手汗と云々

△てんん 手判と云けり押字の俗語也

△てんぐ 俗語也手筈の義也

△てびぎ 手引の義貢縁の意より依緒也

△てびぎ 界方と云定木也と云て鏢木あるべしひびぎ

△てびぎ といふは槌のたつての鄙諺と云杓子ひめて鏢木と云と云

△てびぎ 縉紳宇都宮十團子の狂哥

△てびぎ といふはけりてのたつたての杓子と云きもかかるとり

△てびぎ 鱈魚皮也と云り皮の珠をうすく磨琢すれば蝶

△てびぎ の形の如し

△てびぎ 鉸具と云蝶番の義之唐詩選の注より蝴蝶扇鉸

△てびぎ と云く神祇式韓櫃の注より塗漆備鏢番打立と云々

△てびぎ 安藝の産王餘魚と似たり吸物と云々

△てびぎ 江戸より云々はうと云堺と云きんこくと云

△てんかん 肥後より畿内のかえぬうなり
蠻語ちてべー國憲紀道より軟瑪瑙也とりへ

てんぢち 俗語也天罰の義あるべー天罰をかかくとり

てんげふ 初て兒をすまふ祝の餅をとり生子傳業人道
常なるぬめてぶふ也

てんかうぞう 口語より天行反り相撲もとり

△てんつぎ 倭名抄より斲木を訓ぜり啄木鳥ともんて
ら六寺の義もや今けつぎとし又木修をとり新撰字

鏡より鴛鴦鳩とめ小寺つぎとより東國にてをけり下總
て番匠鳥とり蝦夷より孤より孫と云○盛衰記より守屋

が此鳥に化ち事とるハ佛を信ぜらるより造れる説あり實
方う雀頼豪が鼠佐國が蝶武文が蟬ふとの同日の談也嗚呼

宛たる哉

てんはむぎ 女貞也とり鼠もとり

△てんりり 音羽山より奇樹也

てんやいり 本草ふ底野迦とるもすりことり蛮國

り出ふ丹藥也まことすハ名もてや國の属るびや大秦國

くとり

△てんつきちり 照月を月次よりけり

△てんいぎふ 天名精を紅毛語べり此葉乃

露ととり膏を移ふの名あり我國の万能膏の如

てんりんていふ 篤釋香の紅毛語也とり

鳥跡の義ととら
 太息とら俗語也遠息の略也
 俗語也誰奴の轉也
 俗一厠ととら事物異名一登司同郭登厠神之
 和名抄一燈械と名注り所以居燈盞也ととら
 和名抄一燈心の音訛也ととら今の俗音と同じ
 法花懺法一至心ととら又ととらととらととら〇常
 用の物ハ蘭之又燈心と称する小木の根叢生一莖數穂一
 穂數百花香黄色也ととら西川氏の説く長崎とてたらの

登の部

とあは

△といき

とら

△とらす

とらあり

とらみん

とら今ともとら

とらがい

雲圖抄一作燈階

とらみ

法花懺法一至心ととら又ととらととら〇常
 用の物ハ蘭之又燈心と称する小木の根叢生一莖數穂一
 穂數百花香黄色也ととら西川氏の説く長崎とてたらの

本とて造り花用予をみりての語と又和ふての
ぞうびん 章魚ふりり 胴繩あふべいぞんびともり

ぞうよく 俗語也貪欲の轉訛あるべし

ぞうまん 朱鼈とよみ 胴満の義も又あるにや

ぞうづき 同衝あふべい 築くは俗語也

ぞうのえ 鼈は俗称より泥亀とよみあふべい 加賀越後りの

えとよみよそにぞうとふえ花とよみ

ぞうむらごえ 俗語也 胴張声なるべし

△ぞとつらむむろ 十列の馬也花鳥餘情東遊舞人十人馬り

乗青摺ときて神社の行幸ふとん供奉すくろり 為家集

千子孫神のゆかりのけくまふまふとる十つとる

△ぞのけ 倭名抄に 蠅 蝶とよみり竹取の語きぞのけと

とんくろりきハ色ぬり又青ぞのけあり皆毒けり 疾驅の義なる

べい東國の俗とるろりきつてとろり又かまひ相摸りかる

す西國ととがざろりとよみ本草及文海披沙の説よりハ 蠅 蝶

ハやろりあり石龍子と訓むべし 或ハ兩頭あるけり又双尾なる

あり

△ぞみき 万葉集に 膠木とよみり今俗母の字はけり字

書小考得す 膠木と本義ふあふん或ハつごともり 万葉集に

弥継嗣とよみけを膠木とよみのきとよむとよりとんともり

ハ鬣櫃也とよみり中山傳信録に 桧木一名羅漢杉葉短

厚三稜與中國羅漢松同木理堅臆國中造屋梁柱皆用之

とんえをふハとがたふべし

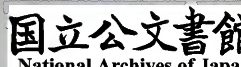
△とかぬら 度感島の琉語也 永良部島の少あり今徳

嶋とよみ琉球の内也 〇元明紀に 南島奄美夜久度感信覚

球美等人来朝とよみ

△とぎす 俗語也 尖の意也

△とぎつく 俗語也 鈍氣つくの義なるべし 〇ぎはよくとよ



語のり

ときりま

時一とほまことあ反ま

ときぞとちりく

万葉集古今集にその其時ともあての

あ

△ミ

木賊と云砥草の義也○小大君集ヲ志方のやと

とけあふふいよ新勅撰集と云川木曾の麻衣と云

ふる延喜式別貢雜物信濃木賊二圍と云云云云云云

甲斐より宗祇旅日記リ又云云云○岩と云と云石斛

あり

こと

口語ノ物事と齊整すふとこととすふと云云

葉素一妹ノ叙と云云云云

こと

木の名と云云云云云云云云云云云云云云

伊勢神宮みく折あとい御饌をみまら臺に敷用ふる

神宮の舊記リ長良女柏とい古より長女柏をいへん

芽と云

こと

木より入る聖子桐也草ふりる蕺菜也毒痛乃

あ

こと

刺簪也といつ北國より出ふり如く方形

と云

こと

海中の産也木槭に似たり本草石鐘乳の釈名

り鴛管石あり入門はて二種といふと是といふ今薬店に此

木賊石と謬て鴛管石といふ○奥州石城山の温泉より赤鴛管

あり

こと

人と罵の辞と云鈍頑子の音也といふ鈍物

△と

俗の口語よおて置けと云とけ開くおけと云と

と

俗よとけと云と云と云と云と云と云と云と

と

俗よとけと云と云と云と云と云と云と云と

どいもどろ

△どいもどろ 何處とよみ俗語也○土鹽の義とあり

どこか 常小水のたゞぬ井とよみとろり

どこあつ 撫子の一名常夏の義盛の久きとよみ也古人と

鐘衆抽衆草故曰撫子艶色契千歳故曰常夏とろり秋冬ら

けく咲とろりされど万葉集ハとろりとろりとろり歌あり大鏡

裏書り殊殿太后をよでこの御とやをふり改て常夏の名

ありとろり○萬葉集ハその立山ここ夏に雪つりささてとよ

ろるハ唯つゆとろり意とろりハハハと常懐のろりろり辞と接と

称とろりとその義とろりびきとろり○後世の花弁ハ名派冒せり物多し

とろりかつそく 所の為来とろり義所法則也豊前と恒規

と云大隅薩摩と鑄形と云やろり

△どさ ざととこけふとろり跌倒の声とろりべーざととろりざと

つろりとろり

どらう

斗筲とのけり師古云筲竹器也容一斗選數也

どらひのびろ

鶏脚菜とよ延喜式ハ鳥坂苔とよん雞

冠菜とのけり唐山の俗紅葉ともろり和名抄とろりらひのびろ

とよんらひ海物異名記ハ赤菜とよんらひとろり○ろりの

足と称とろりとのハ同類異品也燕苔也とろり

△どいハ 俗とろりハもゆのめとろりろり羊齒の義とろりろり

どいた 北山抄ハ補羊足王事とよん

どいぢい 俗語也行年とよん羊齡の排行とろり

どいぢい 曆家ハ歳實とよん事あり○世俗贈物の分先とろり

又其器ハ物とよん返とよん大神宮年中行事歟山伊賀利の

神事の條ハ折敷ハ小石とよん羊の義と号ハ分て贈ふとろり

どらぢやろり

泥躰とよん音轉とよん又泥生の音とよんろり能わろり

ち麴こうじり易やすくして急いそぐつものくとて田舎の火災さいり用もちふ竹たけのたけく藁わらと圓座えんざの如ごとく附つたることをとらえん棒ぼうとつつ火急かきゅうの用もちふとつつ○護良親王ごらぎんおうの吉野よしのより入いる時ときに尼妙にせう圓えん柿かき粥じゆくを供ともすことをとらえ妙せう圓えんが宅たくハ小森村せうまのむらの西にしハ有あり十津川じゆしんがわの莊むらなり

ころふ 苦く菜さい也なりとつつ芹菜せんなの義ぎや又秋あきああきとも井いの

ばらばらとつつ 共ともの義ぎらら助けたすけの辞ことば之これ何方いづこにいつつ○ころえととら

ごちろ 俗語しやくごと同意どうぎなりなり或あるハ迷臍めいしととら

ごらん 葉子はこととら演えん繁はん露ろり古書こしよ皆みな卷まき至いたり唐始たうし為なる葉子はこ今いま

ごらまの 書冊しよふ也なりととららるる 鮫さま飴あめ和豆わまめ也なりと字書じしよにに見みる

ごらふまや 俗語しやくご也なり西土せいどの混沌こんとん没帳ぼつちやうの意い

ごらぐとー 鬼おに白しろ也なり葉七はなな葉樹はななじゆの如ごとく○ころ人ひと参まるると相似さうじ

ころり 十月じゆがつの義胎ぎたう妊にんハ满月まんげつ也なり

ころり 神代紀しんたいぎにに十握じゆく釵かんざしとと見みる

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

ころり 俗語しやくご也なり取とつ置おつの意いととら

△この 俗語也との様どの方ど品ど物どつらつらまの
意あり

このこ 礪の粉也磨刀塗とんくろ

△このバ 今地名小ソラ志摩國の志摩ハハと飛幡浦とソ

万葉集にるる○山城の鳥羽ともうけり○鳥羽殿の趾ハ紀伊郡

中鳥村城南神社の南小あり神皇正統記古昔上皇皆遷御

于朱雀院謂之後院至白河帝以鳥羽院定為後院とるる万

葉集く白鳥の鳥羽山松とよえりハ此哥の次く衣手を打廻里り

ハ我とよえハ大和あるべーウカアそのお廻の前ともよそ神

南備高市郡小あれ同郡小や古事記孝靈乃皇女ハ倭飛羽

夫若屋比賣といふも同義也○鳥羽繪ハ鳥羽僧正の筆也僧

正覚猷ハ源隆國の子也

このツ 途方と失ふ途方小暮るくちどつ又度方ともい

そり或ハ十方とん上下八方をいふ也○異邦より来ふ斗方及

封套く草木魚鳥人物と彩色くそろありこそ書生騷客又ハ
出家人の用ふ所くそ有官有位ハ用ふ事を得ずく朱氏
談綺くそえたり斗方ハ書簡紙とソハ封套ハ書簡袋也
このまろり 念をよろり水の花走ふ後あり

このれろり 被問草也萩或ハ松也と藏玉集りそろ

△このび 鴛とソハ鴉と同ト詩く鴛飛天とあふとめて名と

そろあふべー 蝦夷くやつとそとソ○鴛鳴る風吹といハ曲禮ハ前

有塵埃則載鳴鴛注り鴛鳴則將風とんたり○倭名鈔り

鴛とそそとソハ訓せり馬糞鷹也とソ○鴛ハ天狗の乗物

とソ事盛衰記くそろ○今昔物語く五條道祖神の祠

ハ大枲樹あり一時佛はて樹上く現ぶ都人集拜す源光樹下

ハ到り人を避く仰瞻時と移りて目さゆらる佛忽く變りて大

鷓とあつて墮るりともい○安く鴉と毀てハ火災く遭と俚俗ハ

つ此事や驗ありともい○鴛ハ鷹と生とソハ詩傳く古語云

鳩、鶺鴒、鶺鴒と云々

ごび

ごひ

俗に瓦樋をさう土樋の義あり。土肥とさう相模國也。土肥實平、平姓高望王の後

ごびん

常陸出雲四國にひを清て唱ふ土瓶の字あり。出雲常陸にごびんと云ハ牛馬のきん玉あり

ごびと

倭名抄に鯨とさうり文鯨魚也。魚の羽翼ありと能飛くとさう中山傳信録に俗呼飛魚とさう新撰字鏡

り鯨とさうり字考に○一書に飛魚ハ別物あり。彈塗也とさう鯨魚の如くて二足あり飛揚ふもの

ごびとせ

あり西筋とさうりとせとさう

ごびとろ

鉄落とさうり飛屑の義也

ごびり

草木の花とさうり間色とさう

ごびり

此と食ハ人として飛走るまじふ草也。またあは

類あり

ごびり

水風くとさうりさうハ踊り上ふとさう

ごびらち

其形の鳶背に似るより名とん。○ごびの者と云

ごひがさき

問難と

ごひがさき

新撰字鏡和名抄に石楠草とさうり俗相傳ふ

ごひがさき

除日り民に此木の枝をりて疫鬼を除ふとて名を得た

ごびやふ

又今西國にハ除夜に此木を焼て戸開の義と祝すか俗に

ごびやふ

又まらまら又うハまらとさうり石南州ハ今

ごびやふ

砂石集に突拍子と書常に銅拍子とさうり律書

ごびやふ

樂圖小出自西域とる鏡鉸の如く一説に銅鉸子也とさうり○大

ごびやふ

和の賤者ハぬふハのさうり其形の似たる又謬て土百姓と云

△ごみかひ

蚌とよ海産水産の二種あり海産のりすづみ水産のみで貝共く同物也

△ごぼけふ

寝どがけをよぼけふと云ふは、惘然たる之空ハ虚偽と云ふ今氣のさけりゆるをよぼけふと云ふ意通つる或ハ朦朧気と云ふ

△ごんがえ

鯿をよ泥亀の交りたりと云ふ通じたりと云ふ三州吉田小磯目氏あり強力の士也此の取川端へ出て月夜を拜する川より大なるるも狐か一鬢狐と云ふ引んと云ふ其をよ取て曳んとすろくろく短刀もて其を截てゆりり、川下の磯端へ三畳敷ありゆる鯿浮きたるを里人にもよ集り曳上り水行を截らぬをよ前より溺死人ありて骸をよりまをよ、よて磯目ウカ法法ふ麻の細串と十五人おて曳小磯目一人曳ゆきろろと云ふ安永二年の秋修津の堀りて鯿鳩と引入るる○ごりの兒の鏡とよ水草ハ水鼈也と云ふ又ごんがのげかとも云ふ

△ごんきとろく

遠國也又絶國と云ふハ漢書の註く遠之國と云ふ

△とまりとろく

撫子の異名也と云ふ

△ごんこ

湖邊石垣の間く居魚也形ハきりかぶのぶとく色黒く斑文ありて腹白く長さ五寸幅四寸なり口の廣さ三寸ぐとありて形異形の品あり夏日夕立り水上下に浮く腹をたくと云ふ國ハよてごんこちとよこちハ似たりと云ふこ小き品と云ふ杜父魚の類也伊祿あてハカドのび茶をよる也と云ふ

△ごんど

俗に正月十五日の爆竹と云ふ唐土の故事と云ふふゆるべし七種なる時と日本のもく唐土のもくりて云ふ○田取と云ふ備ふ人をよむと云ふとのをよるをよべし或る由人の物と云ふ田ハ古語拾遺に云ふなり

△ごん

緞子の音也毛段金段と云ふ天工開物と倭緞あり閃緞とも云ふ○船とよハ加賀守の細引網也九州と

いどろすと呼しども。○（俗に蜻蛉をいふ）飛羽の義にとりてよく花かけら地

とんぼり 俗に蜻蛉をいふ 飛羽の義にとりてよく花かけら地

秋津虫と云ふより他なる文字之仙臺南部にありつると云津

輕くもんぶりの常州と州野州とあるごとく○かひはるえんぶ

ハ紺蟻之肥前高野の江戸と云ふ○江戸と云ふはとんぼり

奥州と云ふはつづのつづにけづと云肥前と云ふはとんぼり

品あり又蚊とんぶあり袍のふると云と似る也とりて○州

よとんぶ白附子之姫鳥頭ともよふ又貝少と名あり

とんきん 東京の唐音也外國西洋の内也

とんぶり 多識編より楮子と訓たり信州おらぶんと云

とんぶり せんぶ椽實と云栗の皮と云ふの實と云ふ下考ふべし○船

とんぶり 水と泳く兒戯と云ふ其鼓動の音より云ふ

とんぶり べし○木の名と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

とんぶり 俗語也西土と云飛言と云ふと云ふ

とんぶり 猫睛石也舶来の物之食物本草に形如猫眼

とんぶり 逐時轉換と云ふ又福と云ふと云ふと云ふ

とんぶり 土左の方言血竭樹也と云ふと云ふと云ふ

とんぶり 阿蘭陀の筆者と云ふ

とんぶり 新撰字鏡より使と云ふ

とんぶり 燈花也俗に丁子頭と云ふ○燈花を瑞と云ふ

とんぶり 陸賈の語に燈花得錢財と云ふと云ふ○早の兆と云ふ蘇

東坡が語に金星之雜出又燈花之雙懸奴婢喜而告予曰此

雨止之祥也と云ふと云ふ○居家必用より占燈花経と引く委

とんぶり 記せり

とんぶり 建武年中行夏より小忌御燈と供すとの

火とあるはてしなくしほろをむと名る雲客諸役抄に供忌火御殿油之後大忌人不昇殿と云う

△とやの 鷹とハ九月媒とて取込み鳥屋待の義あり
とや野のやういふと云はれしと云うとよめる歌とてを採り東歌の中を以て東國といふべし

△とよぎ 豊田ハ姓といふ字舊唐書に及也

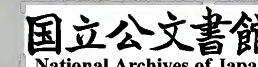
△とよら 新勅撰集堤とハ豊浦の宮といふと云うてハ哥ハ竟宴の哥にハ豊浦宮ハ推古天皇御中なる長門の豊浦といふべし

△とらたる 虎竹の義大毛竹と云う

△とらとら 新撰字鏡より蘭茹と云う
とらとら 草といふも一種ハ徐長卿に似て秋白花と開き穂とある一種ハ秋緑花といふき穂とある葉厚く末尖まう又の

つてソウの一名と云う樹よりソウ一名竹杉佳財也日向霧島
と云う刺杉也と云う又樅と櫻と此名あり○伊吹虎尾と
よぶを奉参也と云う○白前と云う又云うと云う○ハ
小と云うは尾といふも白微也と云う○兵器より云う流星鞭也
鞭の先より鉄の丸と付たふ相と云う

△とらいー 深草寶塔寺の虎石ハ其形の似るを云う豊大閣の時洛陽の虎石町と云う伏見より移されたる石也○近世に候家箱根より求免せられて奇異の有る虎石ハ大磯の虎石塔也今浅草實相寺にあり○大磯のほうりにあると云うふの小石と云う虎石と云う澤菴和尚の東関記より云う石と云ういふの遊君石と云うといふと云う
△とらげうろ 漢語抄に連錢駒と虎毛馬也と云う新撰字鏡より駒と云う又酒毛馬と云う
△とらつぎ 取次と云う紹介と云う



こうたて

取立て用ひくはる登庸とよる

こうもち

鳥糞の義ある唐韻く糞所以粘鳥也とる

こうぶく

俗語也取纏の義ある

こうめ

鳥海とけり鳥海山八日本一四の高山とよ山の左

右大洋海也山中小方一里の湖水あり因く名とる是式所

謂出羽國飽海郡小物忌神社也

こうざい

鳥貝の義以貝のつらふ化すと名と得ると

つらひ尾崎と多し他邦小舟及び舟をひらく舟は鳥貝舟と云

撰津志と海蛤とる和名抄大和國漆下郡と鳥貝郷あり

こういん

俗語也統紀の意にる

こういん

處置とる

こういん

徒然草とる不取敢の義也俗くとるあふせると

ふいばり菅家の奇とる

こうふこ

度爾格と譯す天竺より西北とるふ蠻國ありと

こう

こう

黄蜀葵一名側金盞とる

紙の木とも大なりとる紙とるに用ふ故也天行開

物と紙薬水汁とる薯蕷汁とる義同し庭訓と薯

蕷腐とる奥州とる山あり其山中ふ産むるところの薯

蕷とるにる青洲汁とる青のうと雑ふとる

こういん

佛經と兜羅綿とるけりもんやあて織る布と

とる最勝王經の註とる謂野蠶繭名妬羅綿とる

今とる山すぢぎぬちり○けとるめんハ裾子也

